

平成二十五年四月十日発行
皇學館論叢第四十六卷第二号 抜刷

研究ノート

熊野市域の言語研究

——「ライ」について——

松
田
麻
希

熊野市域の言語研究

—「ライ」について—

松田麻希

□ 要 旨

三重県熊野市で文末に用いられる勧誘の「ライ」について考察し、①助動詞であること、②井戸川流域に分布の中心があること、③女性語としての位相差が小さいこと、④待遇表現がないことを明らかにした。

□ キーワード

勧誘の助動詞ライ 勧誘の助動詞ラ 方言の商業利用
方言地図

第一章 問題の在り処

第一節 熊野市周辺の方言

熊野市は三重県の南部に位置し、北西部は山々が連なり、奈良と尾鷲市に隣接している。また、東南部は熊野灘に面し、南西部は和歌山県と奈良県に隣接している。温暖多雨な気候と市の面積の八十七パーセントが山林という地形から、木材生産地として知られ、農業では温暖な気候に育まれたみかんの栽培が盛んであり、この地域の特産品となっている。また、自然の港と漁場に恵まれて漁業も盛んである。

紀伊半島はかつての交通の中心であった東海道・山陽道の両本街道から逸れていた。そのため、交通も不便であったので人の往来も少なく、ことばも昔のまま変わらないものがあるというふうに見える話者も多い。現在は国道自動車道・紀勢線も通り、交通が便利になった。また、平成十六年に世界遺産に登録された熊野古道などの観光地への人の往来も増加している。

先に述べたように南三重地域は海と山に囲まれ、漁業だけでなく林業も盛んである。そういつた背景に加えて地理的に和歌山県に近いことから、和歌山県新宮市の経済圏内であり、新宮市中心の文化圏に属している。ことばも三重県や南牟婁郡という区別ではなく、県境を越えた南紀州であるという意識が強いようである。そのため、熊野の方言にも和歌山県東部と共通する点が多いとされている。つまり、熊野灘沿いに南下するにつれて北三重方言との共通点も薄れていき、反対に紀州として同じように区分される和歌山県と共通点が多くなると言える。

熊野方言の概観については、丹羽一彌氏『三重のことば』^①（「日本のことば」シリーズ）を参考にして述べていく。

三重県は近畿地方の東部に位置し、東近畿方言と南近畿方言の領域にまたがっている。大きくは近畿方言に属するものである。熊野市を含む県南部は南近畿方言という近畿周辺部の方言ということになる。その熊野市は南北に長い三重県の中で南三

重方言に区分され、その中でも南牟婁方言に細かく分かれる。

語法では助動詞による敬語表現がほとんどなく、文末の助詞などの丁寧表現だけであると言われている。また、文末助詞には相手が目上・同等・目下であるとき、その敬意の程度に合わせて勧誘・念押し・疑問の形が変化する。熊野を含めた南三重の地域では文末の助詞によって聞き手に対する丁寧さを表すことがあり、目上・同等・目下の待遇に応じた終助詞がある。

熊野市の方言は、南牟婁方言の海岸部は他の南三重方言と共通点が多いが、奈良県に近接している山間部はアクセントが異なるなどの特色がある。このアクセントは京都市から独自に変化してできたと言われている。

第二節 勧誘表現「ライ」について

「ライ」は「……しよう」と相手を誘う意味の勧誘表現である。これは相手を勧誘することに大きな意味を持ち、自分も一緒に同じことをするという前提があると考えられる。

この「ライ」は丹羽一彌氏^②や榎垣実氏^③などの論考で述べているように熊野市だけでなく三重県では尾鷲や南牟婁郡、和歌山県の南部や飛地の北山村に広がっていることがわかる。このことから「ライ」は紀州に広がる方言の一つだと考えてもいいだろう。前川俊一氏の「熊野市木本方言ノート」^④では「ーラ」を

次のように述べている。

動詞の未然形につづいて「…：しよう」と相手をさそい、うながす意をあらわす。

「ハヨイコラ」（ぐずぐずしないで早く行こう）

但しこれは相当ぞんざいな言葉遣いで、極親しい間柄でなければ用いず、また女性の間では普通用いない。それよりもっと普通に用いられるのは「…：レ」である。

「ハヨイコレ」

これよりもっと丁寧になると「…：ライ」となり、また目下の者に対しては「…：ラエ」となる。

また、福田学氏の「熊野方言における文末辞について（熊野市・南牟婁郡）」⁵⁾では次のように述べている。

勧誘表現のしかたには、勧誘の意味を表わす辞を使う時と婉曲に表わすために疑問の辞を用いる時とがある。

（イ）ラ、ライ、ラレ、レ、ラケ、ラケヤ

ハヨ イコラ （全）

早くいこう。

ハヨ イコラレ（紀和町西山、熊野市神川、五郷、飛鳥町）

ハヨ イコライ（エ）（沿岸地域）

ハヨ イコレ（全地域の女）

熊野市域の言語研究（松田）

ハヨ イコラケ

ハヨ イコラケヤ

（熊野市飛鳥町、五郷町）

（早くいきましよう。）

ここでは疑問の辞を使う場合は述べず、勧誘の意味を表す辞を使う場合のみを取り上げて考えていく。

これらの説を踏まえて、熊野市でのそれぞれの分布と待遇表現が現在ではどのようなようになっているのか、また、どのように使われているのかを明らかにしていく。

第三節 接続についての考察

勧誘表現の「ライ」はいくつかの先行研究において、終助詞あるいは文末助詞であると考えられていることが多い。しかし、「ライ」は助詞ではなく助動詞であると考えて述べていきたい。そのためには、まず「ライ」がなぜ助詞であるのかを述べている論文を説明する必要がある。

藤原与一氏の「方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）」⁶⁾では「ライ」は代名詞系の転成文末詞の中で人代名詞「ワレ」系統に含まれると述べている。この転成文末詞とは、文表現上の途中の切れ目のことば、文終止法での終止要素のあるもの、単純動詞の単純命令形などが文末詞化するものである。文の訴えかけを効果的に表現し、様々な意味を持たせるものであるとす

る。代名詞系の転成文末詞は、例えば「わたし」や「あなた」などと呼びかける要素としては最適なものと言えるということである。

桐本逸鬼氏の「熊野の方言地名あれこれ」⁷⁾では南牟婁郡と熊野市に地域を限定している。熊野は紀伊半島の南端の地形からアイヌ語南方系の影響と京都地方からの古語の影響により古語の形が残っていると述べている。その中で、「イコラ」「イコライ」は「行き参らむ」の変化したことであるとされている。

柳田国男氏の『毎日の言葉』⁸⁾では「ラ」「ライ」「レ」は助動詞ではなく、後に付く代名詞が融合したものであるとし、「イコライ」は「イコウ、ワレラ」からきていると述べている。これは藤原与一氏の転成文末詞の人代名詞「ワレ」系統の元となる説であると言えるだろう。

上山景一氏の「紀州方言の動詞」⁹⁾では動詞の用法を述べている。そのうち、動詞の活用形を方言の本質に即して最も多くの異なる活用形を有するものを標準として六つの活用形を立てている。第一活用形から第六活用形と名づけられた中で第五活用形を取り上げた。

第五活用形

(1) 未然形といふべきもので、動作が未だ然うなつてゐない意を表す形である。此の時五段活用の動詞に於ては第

五活用を其の儘用ひるか、又は第五活用の語尾長母音化する。五段活用以外の動詞に於ては「ヨ」に連る。イマカラカコ。イマカラカコー。ハヨオキヨ。ハヨシヨ(シヨ)。

(4) 紀州言葉の特徴をなす「ラ」は五段活用の第五活用形につくものである。五段活以外の動詞には第五活用形に「ヨ・ヨ」を添へたものに「ラ」をつける。

ハヨカコラ。ハヨイコラ。モオキヨラ。

つまり、この上山景一氏の説では「ラ」は五段活用の未然形に接続し、それ以外の活用には「ラ」の前に「ヨ」を接続するということである。

では、「ライ」の意味から「ライ」は標準語ではどの言葉に該当するかを考えると、勧誘表現である「……う」「……よう」が適当であろう。例えば用例を標準語に訳した場合でも、「イコライ」は「行こう」と訳している。このことから助動詞の「う」「よう」に基づいて「ライ」の接続と活用を考えたい。

「日本国語大辞典」¹⁰⁾によると「う」「よう」は助動詞「む」の変化したもので、古くは「む」と同様に全ての活用語の未然形に付いた。しかし、現代では「う」の場合、五段活用の動詞、形容詞「……かる」、形容動詞「……だろ」、助動詞「ます」「です」「た」「だ」の未然形に付く。また、「よう」は上一段活用・

下一段活用・カ行変格活用・サ行変格活用の動詞、助動詞「れる」「られる」「せる」「させる」の未然形に付く。意味は種々あるが、そのうちでも相手に対する勧誘、または命令的な意を挙げる。つまり、「……しよう」「……しろ」という意味である。

今までのことから「う」「よう」の用法・接続を踏まえて考えると、「ライ」はこの「う」に当たる方言なのではないかと考えられる。例えば、五段活用の「行く」では未然形の「イコ」に接続して「イコウ」になり、「イコ・ウ」から「イコ・ライ」に置き換えることができる。上一段活用の「見る」では未然形の「ミ」に接続して「ミヨウ」となる。そして、助動詞「よう」の「う」が「ライ」になり、「ミ・ヨウ」から「ミ・ヨライ」になったと言えるだろう。その他の活用でも同じことが考えられる。つまり、基本形が「ライ」と「ヨライ」であると考えれば、「ライ」が助動詞であるということにも説明がつくだろう。活用については、「う」「よう」の場合は終止形と連体形があったが、この「ライ」は勧誘の意味を持つため、相手に呼びかける形になる。よって、主に文の末尾に付いて体言に連なることはほとんどない。そのため、活用は終止形のみであると考えられる。

これらのことから、「ライ」は動詞の未然形に続いて「しよよう」と相手を誘い、促す意味を表す助動詞であると考えられる。

る。これは五段活用動詞の未然形のうち意志を表す形に接続するものであり、五段活用動詞には「ライ」を、それ以外の活用の動詞には「ヨ・ヨー」を添えて「ヨライ」を接続することになる。あるいは、熊野市海岸部には意志・勧誘形のことばには「オキロライ(起きようよ)」「タバロライ(食べようよ)」など、ラ行五段活用の形になる地域がある。

しかし、カ行変格活用の「来る」に関してはその考えに沿わない。「よう」の用法を考えるならば「コヨウ」となり、「ライ」を使っても「コヨライ」となるはずである。実際にその言い方をする場合もあるが、「コーライ」などの変容した表現や、あるいは「来る」を使わずに「行く」を使って「イコライ」と話す場合もある。よって、「ライ」を接続するには、活用語によって変化があると考えられる。この様子が実際にあるかどうかも言語調査の結果を元に確認したい。

助動詞		語
ヨライ	ライ	
○	○	未然形
○	○	連用形
ヨライ	ライ	終止形
○	○	連体形
○	○	命令形

種類	語	語幹	未然形
五段活用	行く	い	こ
上一段活用	見る	(み)	み
下一段活用	寝る	(ね)	ね
カ行変格活用	来る	(こ)	こ
サ行変格活用	する	(す)	し

第二章 調査結果

第一節 調査方法の整理

三重県熊野市内の木本・井戸・有馬・大泊・瀬戸・金山・新鹿・波田須・飛鳥・五郷のそれぞれの地点での言語調査で、普段親しい相手に言う言い方について八つの質問を行なった。

調査地点

調査対象の氏名・年齢・性別

一、「一緒に食べよう」を普段親しい人にはなんと叫びますか。

二、「行きましょう」を普段親しい人にはなんと叫びますか。

三、普段親しい人には「しよう」を「しヨライ」と言

いますか。

四、「買ってこよう」を普段親しい人にはなんと叫びますか。

五、「一緒に来よう」を普段親しい人にはなんと叫びますか。

六、「ミヨライ」の意味を教えてください。

七、「ユウタツテコレ」の意味を教えてください。

八、相手を誘うときの言い方で、語尾に「ライ・ラ・レ・その他」のどれを使いますか。また、男女や年齢に違いがあると思いますか。

以上の項目の調査結果をまとめたものである。

福田学氏の論文にあった「ライ」の分布が一致するかを確かめるために、各地点で調査した結果に基づいて方言地図を作成した。なお、地図の記号には同じ表現での関連性を見出すためにそれぞれ同じ表記を用いた。

また、それぞれの語形については初めに詳しく述べるつもりであるが、それ以後に同じ言葉が出てきた場合には「ライ」系統・「ラ」系統・「レ」系統・「ラエ」系統・「カ」系統・それ以外は「し」系統と適時表現していきたい。



図2 「食べよう」



図1 調査地点

第二節 「ライ」系のことばの用例・分布

「一緒に食べよう」については、図2のようになった。「タベヨライ」が木本・井戸・大泊・瀬戸・金山・新鹿・波田須・飛鳥の地点で見られる。瀬戸では「タベロライ」、井戸では「タベヨラ」「クオラ」「タベヨレ」「タベヨカ」、有馬では「タベニイコカ」などが見られた。

なお、木本・大泊・飛鳥では「ライ」系統と「カ」系統が、井戸では「ライ」系統と「ラ」系統と「レ」系統と「カ」系統が混在している。また、この「食べる」の言葉では調査した地点のうち二箇所を除いた全てに「ライ」系統が見えたことから、熊野市の全域に存在していると考えられる。

「食べる」については、「タベヨ」は有馬・五郷を除く全ての地点で見られた。「タベロ」は瀬戸、「クオ」は井戸、「タベニイコ」は有馬で見られた。なお、井戸では「タベヨ」と「クオ」、瀬戸では「タベヨ」と「タベロ」が混在している。

次の質問二では、「イコライ」は木本・井戸・大泊・瀬戸・金山・飛鳥・波田須・新鹿の地点で見られた。「イコラ」は金山、「イコレ」「イコラエ」は井戸、「イコウ」は井戸・有馬、「イコカ」は木本・井戸・有馬・瀬戸のそれぞれに見られた。

なお、木本・飛鳥では「ライ」系統と「カ」系統が、井戸で

は「ライ」系統と「レ」系統と「ラエ」系統と「ウ」系統と「カ」系統が、有馬では「ウ」系統と「カ」系統が混在している。また、この「行く」では海岸沿いと井戸川沿いと山間部に「ライ」系統が、井戸川沿いを中心に「カ」系統とそれ以外の系統が広がっている。

前部分「行く」については、「イコー」は五郷を除く全ての地点で見られた。五郷に関してはそもそも「ライ」系統の表現は使われていないことである。

質問三では、「シヨライ」「シヨライ」は木本・井戸・瀬戸・大泊・金山・飛鳥・波田須・新鹿で見られた。「シヨレ」「シヨレ」「シヨラエ」は井戸、「シヨカ」「シヨカ」は木本・井戸・有馬・瀬戸・大泊のそれぞれで見られた。

なお、木本・大泊・瀬戸では「ライ」系統と「カ」系統が、井戸では四つの全てが混在している。また、この「する」では海岸沿いと井戸川沿いと山間部に「ライ」系統が、井戸川沿いを中心に「カ」系統が広がっている。その他の表現もあるが、主にこの二つが熊野市の全域に存在していると考えられる。

前部分「する」については、「シヨ」は大泊・五郷を除く全ての地点で見られた。また、「シヨ」は井戸・瀬戸・大泊・飛鳥で見られた。なお、井戸・瀬戸・飛鳥はこの二つが混在している。

質問四の「買ってこよう」では複数の語彙が見られた。「カオライ」「カインイコライ」「カッテコライ」「カイモノニイッテコライ」「コーテコライ」、「コーテコレ」「カインイコレ」、「カッテコラエ」、「コーテココカ」「カイモノニイッテココカ」「カインイココカ」「カッテココカ」を、「コーテコー」、「カインイッテクル」「コーテキテイ」「コーテクル」「カッテクル」の回答を得た。

分布については、「ライ」系統は木本・井戸・大泊・波田須・飛鳥のそれぞれで見られた。「ラ」系統は見られなかった。「レ」系統は井戸、「ラエ」系統は井戸、「カ」系統は木本・井戸・瀬戸・金山、「ウ（ー）」系統は木本、「カインイッテクル」「コーテキテイ」「コーテクル」「カッテクル」は有馬・金山・新鹿で見られた。

なお、木本では「ライ」「カ」「ウ（ー）」系統が、井戸では「ライ」「レ」「ラエ」「カ」系統が、金山では「カ」「クル」系統などが混在している。また、この「買ってこよう」では多くの表現があったが、語尾に注目して考えると、海岸沿いと井戸川沿いと山間部に「ライ」系統、井戸川沿いに「カ」系統と複数の表現が見られた。これも主に「ライ」系統と「カ」系統が多く広がって存在していると言えるだろう。

多くの語形が回答に出たため、「カー」と「コー」の二種類

に分類した。

これによると、「カー」は木本・井戸・有馬・大泊・波田須・飛鳥で見られた。「コー」は木本・井戸・瀬戸・金山・大泊・新鹿・飛鳥で見られた。なお、木本・井戸・大泊・飛鳥ではこの二つが混在している。

質問五では「コーライ」「イコライ」、「コヨラ」、「コレ」、「コーラエ」、「コーカ」「コヨカ」、「コイエ」「クル」「イクカエ」「マタネ」の回答を得た。

これによると、「ライ」系統は木本・井戸・大泊・波田須・新鹿・飛鳥で見られた。「レ」「ラ」「ラエ」系統は井戸で、「カ」「コイエ」「クル」「イクカエ」「マタネ」系統は有馬・金山で見られた。

なお、木本では「ライ」系統と「カ」系統、井戸では「ライ」「ラ」「レ」「ラエ」「カ」系統が、有馬と金山では「カ」系統とその他の系統が混在している。また、この「来る」では海岸沿いと山間部に「ライ」系統が、井戸川沿いを中心に「カ」系統も存在していると考えられる。

前部分の「来る」については、「コヨー」は井戸・瀬戸で見られた。「コー」は木本・井戸・瀬戸・有馬・金山・飛鳥で、「コイ」は大泊で、「イコー」は大泊・波田須・新鹿で見られた。なお、井戸・瀬戸では「コヨー」と「コー」が、大泊で

は「コイ」と「イコー」が混在している。

回答例を見ると、「来る」と「行く」の二種類のことは知らわれた。このことは、この質問に対して飛鳥では「来る」ということばではこの表現は使わないと答えた者、あるいは木本・大泊・波田須・新鹿では「イコライ」と答える者がいたことから推測することができる。つまり主に海岸沿いでは、この「来る」に関しては「行く」の意味を含んで「イコー」系が使われていることが多いと考えられる。

質問六では、「ミヨライ」の意味を質問した。意味がわかる場合には「○」、わからない場合には「／」とし、図3のように表した。

これによると、意味が理解できたのは井戸川沿いを中心にした木本・井戸・瀬戸・有馬・金山・大泊と飛鳥であった。反対に理解できなかったのは五郷・波田須・新鹿と木本・有馬・一部の飛鳥であった。加えて述べておくと、意味は「(一緒に)見よう」であり、質問事項の「ライ」系統以外にも「ラ」「レ」「カ」の系統が使用されていた。

質問七では「ユウタツテコレ」の意味を質問した。意味がわかる場合には「○」、わからない場合には「／」とし、図4のように表した。

これによると、意味が理解できたのは五郷と飛鳥の一部を除

図3 「ニコライ」



図4 「ユウタツテコレ」



いた全ての地点であった。加えて述べておくと、意味は「言うてこよう」や「聞かせてあげる」など、意味に多少の違いはあるものの、概ね「(相手に) 伝える」であった。質問事項では「ユウタツテコレ」と記したが、話者には「レ」系統以外にも「ライ」「ラ」「ラエ」「カ」「その他」の系統が使用されていた。質問七・八では意味を問う項目であった。しかし、他の質問事項のことと同じように「ライ」系統の表現であり、話者の「ライ」系統の使用が認められたにも関わらず、「見る」に関しては理解できない、使わないと答えた地点があった。

第三節 商品化に利用される「ライ」

話者による会話だけでなく、熊野市ではこの表現のことはが商品化されている。その例をいくつか挙げて説明していく。

はじめに、熊野市過疎地運送運営協議会が平成二十二年に運送運営を許可した「NPO法人のつてこらい」がある。これは公共交通機関によって住民に対する不十分な輸送サービスが認められる場合に法人が実費の範囲内で自家用車を使用して運送するサービスをするものである。また、平成二十四年九月九日に「紀伊半島大水害復興イベント」行ってみよら♪東紀州元氣祭」が熊野市久生屋町の里創人熊野倶楽部で行われた¹¹⁾。これは平成二十三年に発生した台風十二号の大水害から一年を契機

に東紀州地域の観光面での復興のアピールや地域の活性化を目的として行われたイベントである。

次に「いこらい市」がある。これは始めの頃には熊野古道のツアー客へのサービスの一環で行われており、今では月に一回と定期的に行われる商店街の活性化を目指した歩行者天国のことである。また、同じ商店街には「いこらい広場」がある。この場所は多世代が交流できる場であり、熊野古道や観光で訪れる人々の休憩の場にも使われる。また、物販スペースの「いこらい屋」、それに関連して新商品開発事業を目的とした熊野の特産品を使った商品の開発を行っている。この商店街は記念通りと言い、一九四〇年、皇紀二六〇〇年を記念して作られた道である。この「いこらい」は記念通りのお隣さん同士が肩を寄せ合い、「みんなでいこらいー(いっしょに行こう)」という商店街のコンセプトが含まれている。⁽¹²⁾

熊野には世界遺産に登録された熊野古道が通り、このことから他県からの観光客が増加した。そのため、熊野をさらに広く宣伝する必要があったはずである。地域の宣伝にはその土地特有の特色を出さなければならない。そういった面ではイベントの題に名付けられる方言は有効な手段と言えるだろう。「いこらい」や「みよらい」などの「ーライ」は先に述べているように勧誘の意味を持っている。意味を含め、その独自の表現方法

には特色が表れ、強い印象を持たせることができるという意図が考えられる。逆に考えれば、方言という形を用いて外部に印象づけるためには、多くの人の目に触れることが重要である。その手段としても、観光客などが関わりやすいイベントや商売に利用することは理にかなっている。加えてイベント等であれば、参加を促す意味として勧誘表現のことばは目的に沿っている。そして、観光客だけでなく地元住民にも理解でき、親しまれている方言だからこそ、帰属意識が高まる良い機会にもなっているのではなからうか。

第四節 「ライ」系以外のことばの用例・分布

ここでは、第二節の「ライ」系の分布からそれ以外のことばを抜き出して整理していく。

「食べよう」という言い方では「タベヨカ」「タバニヨカ」があった。それは図2の木本・井戸・有馬・大泊・飛鳥の地点で見られた。なお、「タバヨカ」は木本・井戸・大泊・飛鳥で、「タバニヨカ」は有馬で見られた。

「行きましょう」では「イコウ」「イコカ」があった。それは木本・井戸・有馬の地点で見られた。なお、「イコウ」は井戸・有馬で、「イコカ」は木本・井戸・瀬戸・有馬で見られた。

「くしょう」では「シヨカ」「シヨカ」があった。それは木

本・井戸・有馬・大泊・瀬戸の地点で見られた。なお、「シヨカ」は木本・有馬で、「シヨカ」は井戸・瀬戸・大泊で見られた。

「買ってこよう」では「コーテコーカ」「カインモノニイッテコーカ」「カインイコカ」「カッテココカ」「コーテコー」「カインイッテクル」「コーテキテイ」「コーテクル」「カッテクル」があつた。それは木本・井戸・瀬戸・有馬・金山・新鹿の地点で見られた。なお、「コーテコーカ」は井戸・瀬戸・金山で、「カインモノニイッテコーカ」は井戸で、「カインイコカ」は木本で、「カッテココカ」は井戸で、「コーテコー」は木本で、「カインイッテクル」は有馬で、「コーテキテイ」は大泊で、「コーテクル」は金山・新鹿で、「カッテクル」は有馬で見られた。

「来よう」では「コーカ」「コヨカ」「コイエ」「クル」「マタネ」などがあつた。それは木本・井戸・有馬・瀬戸の地点で見られた。なお、「コーカ」は木本・井戸・瀬戸・有馬・金山で、「コヨカ」は瀬戸で、「コイエ」は大泊で、「クル」は金山で、「マタネ」は有馬で見られた。

これらのことから、「ライ」系を使わない表現は主に木本を中心とした熊野市の南寄りの地点で見られ、井戸川を沿った地域と山間部を含んでいることが多い。その中でも井戸・有馬地点でその傾向が強いようである。

第三章 調査結果の考察

第一節 方言地図の分布についての考察

以上の調査結果のもと、熊野市域では「ライ」が九ヶ所の地点で話されていた。それに該当しなかったのは五郷町で、この地点に関しては八十歳の男性に尋ねたところ、「ーライ」系は使わないという回答が得られた。また、「ライ」系統の勧誘表現は木本の方言であるとも答えた。五郷を除くとほぼ全ての地点でこの表現が認識されている。また、「ラ」「レ」「カ」やそれ以外のものは井戸川沿いを中心とした地点に多く分布している。そのうち「カ」系統は複数の地点で見られ、「ライ」系統の次に多く分布していると言えるだろう。

話者自身を使うかどうかについては五郷に加えて有馬も調査結果に見られなかった。しかし、五郷と違って有馬は意味を問う項目では理解できていた。これから言えることは、「ライ」を知ってはいても使わないということである。つまり、有馬地区の周辺は「ライ」系統を使用する環境にあることが言えるだろう。有馬では対象の話者が移住民であつたためか、それ以外にも調査した話者が元々の地元住民でない場合も少なからずあつたので、有馬だけに限ったことではない。

使うかどうかを問う質問では「ライ」系統を使うと答えた新鹿や波田須の話者であるが、「ミヨライ」の意味を問う質問では使わない、またはわからないと答えていた。また、「来る」では「ライ」系統を使わずに、「行く」を用いて「イコライ」を使うとする。相手を誘う言い方であるならばどのことばにも接続するかとそうではないようで、接続する動詞によって「ライ」系統の有無が関係していると考えられる。

第二節 勧誘表現「ライ」の待遇

飛鳥の八十歳の男性は基本的に「ライ」を使うが、これは目上の人には使わず、自分と同年輩の相手に使う。そして「ライ」は丁寧、「ラ」は命令的またはぞんざいな表現だと答えた。このことから、飛鳥では待遇が存在しているのではないかと考えられる。

しかし、全ての地点で相手の立場によって使い分けるといふ回答があるわけではなかった。特に木本の地点では目上・同等・目下の区別がなく、対等にするといふ回答があった。

その他の地点でも、使い分けるといふ場合、それはあくまで同じ方言が伝わる相手や職業による状況に応じたことば遣いをしてしなければならない相手に対してであり、目上・同等・目下などという立場によるものではない。しかし、相手によって使い

分けるわけではなくても、「ライ」より「ラ」の方がぞんざいだという意識は少なからず存在するのではないかとということがいくつかの回答からも見ることができるといえる。

こうした結果から、「ライ」における待遇表現は先に述べた前川俊一氏の論文にあるような使い分けが全ての話者には当てはまらないと考えられる。

また、いくつかの地点で見られる複数の表現の混在であるが、これは熊野方言に他の方言が混じったことが考えられる。例えば熊野市以外の地域の者が熊野へ移住する、あるいは熊野に住んでいた者が他の地域に移住し、再び戻ってきたときなどが要因と言えるのではないだろうか。前者では他の表現が入り込むことになるし、後者では元来の表現から他の表現が変わってしまうか、ことばが混じることになるだろう。それをふまえると複数の表現が混在しているということにも繋がっていると考えられる。

第三節 年齢差・性差・他者との関係性

今回の言語調査は主に五十歳以上の年代が対象となった。

この勧誘表現は五十歳以上の年代に多く見られる。それよりも若い年代における調査が不十分な結果になってしまったが、調査した話者の意識の面でも複数の年齢による差の指摘が見ら

れた。若い世代になるとこの表現は理解できない者が多いということがある。

井戸の地点では、二十一歳の女性は「ライ」「ラ」はときどき使い、「レ」はよく使うと答えたが、それには話す相手も同じ方言を使うことや親しい間柄であることが前提として挙げられた。

男女による性差は福田学氏の論文に、「レ」は全地域の女性が使うとあった。調査結果からはある地域とない地域に分かれるようである。「あると思う」との回答があった地域は金山であった。「ないと思う」との回答があった地域は木本・井戸・有馬・波田須・新鹿であった。ないと答えた話者の方が多い。しかし、実際に調査した結果からは男女差があるかどうかは明確ではない。方言地図では「ライ」を使う地点は全体的に広がっており、「レ」は井戸に見られた。「ライ」は男女どちらの話者も回答しており、逆に「レ」は井戸地点だけで女性の話者であった。この段階では井戸地点では「ライ」は男性が使い、「レ」は女性が使うと推測できなくもないが、男女関係なく「ライ」と答えた話者が多いこともあるので明確ではない。また、あると答えた金山地点の四十七歳の男性の場合、彼自身は「ライ」を使っており、配偶者の女性は「レ」を使っているということであった。しかし、この女性は別の地区の出身であったの

で、純粹な金山の方言であるとは断定できない。

そこで、言語調査の二十七の回答を比較した。これによると、質問事項で男性は「ライ」と答えた者は十二、その他が一人であった。女性は「ライ」が七、「ラ」が一、「レ」が一、その他が四であった。ここでは男女共にそれぞれが重複することもあった。これを見ても男女ともに「ライ」が最も多く使われており、反対に「レ」は女性のみに使われていた。これにより、調査地点ごとに考えた場合はどちらとも判断することはできないが、全体を通して整理してみると、男女による使い分けは存在しているのではないかと考えられる。

そして、話者にとって、相手と自分の関係性というものはことば遣いや訛りの有無に影響が深いであろうことが考えられる。年齢差の点でも述べたが、相手と同じ訛りで話す、親しい相手である、という二つの点があれば方言を話すと答えた。また、目上・同年輩・目下かも要因の一つとして挙げられるだろう。この違いによってことは遣いを配慮することは生活の中で誰が行うことである。つまり、この表現は相手に通じること、相手が自分に親しい間柄であることが話される条件として挙げられるのではないだろうか。

第四節 現在の話者の使用とことばへの意識

調査結果によると、話者によつては理解できるが自身は使わないという回答が見られた。

その理由として、第一に結婚・仕事などのさまざまな理由で他の地域から移住してきた人がいる。そうした人々によつて熊野方言にその他の方言が混じり、その土地の純粹な方言と他の方言が混同してしまうことがある。あるいは最初に述べた理由とは逆にその土地の者が他の地域に移住してしまうことも考えられる。この移住した者が再び戻ってきて、その者は他の地域の方言に影響されてしまっている。その全てに当てはまるわけではないが、純粹な方言は失われていることが少なくないと考えられる。この理由は勧誘表現が複数混在していた件でも述べたが、結果としては同様のことであると言えるだろう。

第二にはテレビやラジオなどのマスメディアにより標準語の流入が簡単に行われたことである。純粹な方言に他の方言が混同するという現象は初めに述べた原因と共通することでもあるが、ことばの入り込む媒体が異なる点で区別しておく。

二つの理由で話者の意識は比較的若い世代に多いということにあるようだが、それは何も若い世代に限ったことではない。飛鳥で六十七歳の女性は飛鳥に住んでいるが元々松阪出身で、結婚を機に移住してきた。この人はそれぞれのことばの意味や

表現はわかるが、自分自身が全て使うわけではないと答えた。また、有馬では六十五歳の女性も同様の回答が得られた。このように、年齢の高い世代でも方言を使わなくなっている。

質問の中でも、「方言は古いことばだ」という意見も複数あった。つまり、共通語あるいは標準語が「今のことば」で、方言が「昔のことば」と受け止められているとも考えられる。そうした中でも多くの人々の目に通りやすい地域のイベントなどの題に使うことで知る機会を増やそうとしている。そのことは飛鳥では飛鳥地域まちづくり協議会がふるさとのことばの会をつくり、飛鳥の方言をまとめた「ふるさとのことば（飛鳥の方言）」にも述べられている。そのまえがきからの抜粋である。

ふるさとのことばは「わがふるさと」に感謝と誇りを持ちながら、汗した生活、その中で心の大小の動きなど、地域の人々の生活の一切が込みこんだふるさとの固有のことばです。

このように「ふるさとのことば」は今までの生活を振り返り、楽しく読んでもらおうという目的で作成された。それらのことは地域の文化と密接に関わる方言を保存するための活動の一つと言えるだろう。

若い世代にかけて意識が薄れている一方で、このように方言に注目する動きも高まってきているようである。

第四章 熊野市域で使われる勧誘表現

「ライ」についてのまとめ

熊野で使われる方言の中で勧誘表現の「ライ」について調査してきた。この「ライ」は「……しよう」と相手を誘う言い方で、主に三重県の南から和歌山県の南部にかけて広がる表現である。先行研究から、この表現は多く文末助詞であると言われるが、そうではなくて助動詞のことばであると考えられる。それは助動詞の「う」「よう」と「ライ」が同じように勧誘の意味を持ち、接続の方法でも主に動詞の未然形のうち意志を表す形に接続するという共通点が見られたからである。

熊野市の調査では、勧誘表現「ライ」には「ライ」「ラ」「レ」「ラエ」などの複数の表現が見られ、調査した地点での違いも存在した。調査項目のことばによる違いも見られたが、多くは「ライ」が全体的に分布しており、それ以外の「ラ」「レ」「ラエ」も「ライ」ほど多くはないがいくつかの地点で見られた。また、勧誘の意味を含む言い方ではこの「ライ」系のことばは以外の「カ」なども見られた。

第一章で挙げた勧誘表現「ライ」の先行研究を踏まえて、今回の調査結果に照らし合わせてみると、いくつかの相違点が見

られた。

まず、調査した結果の分布にもあるように勧誘の待遇表現に明確な違いはなく、熊野市で調査した全ての地点での使い分けは話されていない。また、男女の性差はあるものの、全てに当てはまるわけではなく、地域での違いも見られた。

方言を話す話者の意識としては、互いに同じ表現が通じる、または、同じ方言で話す相手であることや、自分と親しい相手であることなどが条件として見受けられる。

複数の地点で「ライ」のいくつかの表現、あるいはそれ以外の表現が混在していることが見られる。それには他の地域の言い方が流入されたことが一つの原因として挙げられるのではないかと。例えば第三節に挙げたように、人の移住によることばの定着や混同などがあると考えられる。

注

(1) 丹羽一彌氏『三重のことば』(「日本のことばシリーズ」24、平成十二年十月、明治書院)

(2) 丹羽一彌氏『日本語「終助詞」の分類』(「人文科学論集 文化コミュニケーション学」平成十五年三月)

(3) 榎垣実氏『熊野ことば』(「三重県方言」第八号 紀勢線全通記念特集号、昭和三十四年七月)、『近畿方言の総合

的研究』(昭和三十七年三月、三省堂)

- (4) 前川俊一氏『熊野市木本方言ノート』(熊野誌)第二十一号、昭和五十年十二月、ここでは「国語学論説資料」十八による)

- (5) 福田学氏『熊野方言における文末辞について』(熊野市・南牟婁郡)『三重県方言』第八号、昭和三十四年七月)

- (6) 藤原与一氏『方言文末詞(文末助詞)の研究(下)』(昭和)『日本語方言の総合的研究』第三卷、昭和六十一年九月)、『日本語表現法の文末助詞―その存立と生成―』

〔国語学〕第十一輯、昭和二十八年一月)

- (7) 桐本逸鬼氏「熊野の方言あれこれ」(熊野誌)第四十号、平成六年十二月)

- (8) 柳田国男氏『毎日の言葉』(昭和二十四年五月、創元社)

- (9) 上山景一氏『紀州方言の動詞』(国語研究)第三卷五号、昭和十年五月)

- (10) 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典 編集部『日本国語大辞典』(第二版 第二卷、平成十三年二月、小学館)

- (11) 『熊野市オフィシャルサイト』(<http://www.city.kumano.mie.jp/index.html>) 平成二十四年十一月二十三日、四十時四十分頃)

熊野地域の言語研究(松田)

- (12) 『熊野市記念通り商店街振興組合』(<http://kumano-ikorai.jindo.com/>) 平成二十四年十二月二十日、十三時三十分頃)

(まつだ まき・三重県立昂学園高等学校舎監)

【編輯委員会注】

本論文は、平成二十四年度皇學館大學人文學會奨励賞受賞論文である。